

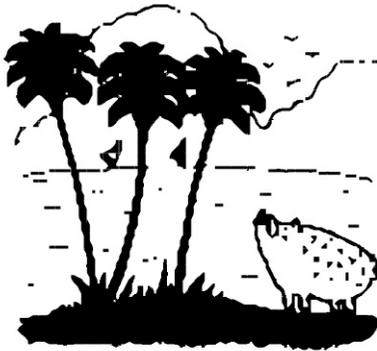
山のたより 21号

平成7年正月号

編集／発行

〒652
神戸市兵庫区氷室町 1-5-11
行守寺 きょうしん
tel (078)511-9691 fax 531-6335

1995



あけまして

おめでとう

ございませう

今年もよろしく

おねがいします

新年の挨拶

正月くらい、

一杯飲つてのんびりしたい

と思つていたのだが……。

「和尚さん、おつてでつか?こんちわー」

だれか来はつたみたい、と女房が出て行つた。あなた、ほら例の、あなたのお友達。早く、そのきたないドテラ脱いで、早く行つて。あのオッサンか、おらん言うとき、お参りに出て行つた言うとき。どこの世界に元旦からお参りに行くお寺さんいるもんですか、早く。何でもええがな、とにかくおらん言え。せつかく正月くらいの人べりしよ思つてテレビ見とつたのに、もうー。そんな大きな声でどなつたら、玄関まで聞こえるやないの。

「和尚さん、お参りに行つてはるんでつか、とにかく居てはらへんのでつか。きたないドテラ着たままでよろしいがな、早よう出て来てくれなんだら忘れてしまいまんがな。早う、早う」

おッ、和尚さん重い腰をやつと上げよつたな。来よる来よる。もう一回復習しとこ。エーッと、新春の……、ん?なんやつたかいな。次が出て来いひんがな。新春の……、んー……、あ、慶……、慶……。あーッ来てもた。

「何をそこでぶつぶつ言いよんねん。ま、新しい年を迎えたわけや、おめで」
「チョ、チョット待つた。こつちにも都合がおまんねん。こつちの準備ができてへんうちに新年の挨拶しはるのはちよつと卑怯でつせ。」

「はあ?」

「いや、とにかくでんな、もう一遍奥の部屋に帰つてもろて、ワシが、ハイッ言うたら出て来てとくなはれ。よろしな、ハイッ言うたらでつせ」

「はあ?」

「いや、はあ?やおまへんがな、物わがりの悪い和尚さんやな、全く。何でもいから早う奥の部屋に帰つとくなはれ。早うせんと忘れてしまいまんが

「ようわからん」
首をかしげながら奥に引き帰す和尚さんを見届け、復習を始めた。えー新春の慶……この次やな問題は、慶、慶……と次の語句を必死で思い起こしている、本堂の玄関に貼つてあつた『日蓮宗立教開宗慶讃七五〇年』のポスターが目にとまった。もう二も無く、あ、これや。わかつたで、新春の慶讃……と、その次はと、エーと、タコウジンジン……、なんやこんな言葉やつたな。なんのこつちやようわからんけど、これでいてまえ。また忘れんうちに早う和尚さん呼ばなあかんな。

「ハイッ、和尚さん。もういいよッ」
「正月早々、オッサンと鬼ごっこしてどうすんねん」
「あかん、あかん。和尚さんよけいな事言うたらあかん、大事なことを忘れてまう。それより、早う言うてエな」
「何を」
「決まってまつしやないか、今日は元旦でつせエ。頭使いなはれ、頭を」
「新年の挨拶やつたらお前の方からせんかい。それが礼儀やないか」
「そやかてワシにも都合ちゅうもんがあらまんねん。先に言うてもらわな困りまんねん。何でもいいから、早う言うて、忘れてしまいかんがな。」
「なんのこつちやようわからんけど、とにかく、おめでと、旧年中はいろいろとお世話に……」
「ストップ、ストップ。旧年中のことはもうよろし。今度はワシの番や。エーと……、エーとやな、エー新春の……」
「あれや、とポスターをいきなり指差した。」
「は？あれは『立教開宗慶讃七五〇年』のポスターやけど……」
「その通り。あの漢字はケイサンと読みまんねんで。そやから、新春のケイ



「お前、それどこで覚えた？何に書いてあつた？ワシも勉強せなあかんから教えてくれ」
「お易いごよう。ご存じ日蓮宗新聞社から『日蓮聖人語遺文習学シリーズ』という冊子が出てまんのや。その第二号に書いてありまんねん。」
和尚さんは、すぐ自分の部屋に行つて一冊の本を携え帰つて来た。
「この本やな？」
「あ、それぞれ。それを和尚さんに内緒で新聞社から取り寄せてやな、正月に挨拶に行つた時に学のあるところを見せよう思うて必死で暗記しましたんや」

サン、タコウ、ジンジン」
「なに言うてんねん、さつきから」
「え？間違うてましたか。ジンジンやのうて、ジンジンジン、三回でしたかいな。」
「ちよつと待て、聞く方のワシが、頭の中を整理してみるわ。つまりワシが新年の挨拶した後、お前はタコがジンジン言い出したやろ。と言うことは、アフリカのスワヒリ語かタガログ語なんかで新年の挨拶しとるんか？」
「何言うてはりまんねん。和尚さん、もつと勉強しなはれや。偉い坊さんになられしまへんで、もつとしつかり勉強してもらわな。ワシはやな、いつも

『山のたより』でアホみたいな扱い受けてまつしやないか、今日は汚名返上や。日蓮聖人のお言葉を使つて、格調高く新年のご挨拶申し上げてまんのや、わからんか？はずかしい事おまへんか？」
「タコがジンジン……がが？」
「そや」と胸を張る。
「も一遍きくけどな、日蓮聖人がジンジン言うてはんのか？」
「武士に二言は無い」更に胸を反る。

宗教法人とはいえぬ

四月会（信教と精神性の尊厳と自由を確立する各界懇話会）主催の公開シンポジウムは十一月七日福岡国際ホールで開催され、約千人の聴衆が集まった。今回は、大阪でのシンポジウムに続き、政治評論家の俵孝太郎、日本大学教授の北野弘久、ジャーナリストの内藤国男、宗教評論家の丸山照雄、衆議院議員の平沼赳夫の各氏がパネリストとなり約二時間半にわたり概ね次のような意見の交換をした。

丸山氏「大阪でのシンポジウム以後、創価学会が四月会の行動に対して人権の抑圧と宗教弾圧であるというキャンペーンを始めた。国会の予算委員会で質問した自民党議員の立候補地での糾弾集会、東京ドームでの五万人集会など人権擁護の名で青年部が動いている。また、毎日新聞の十月二十八日朝刊トップ記事には創価学会と立正校成会が政党支持の自由化を話し合つて決めたように出ている。創価学会の意図に従つた記事を書いていることに危機感を抱かざるを得ない。創価学会は我々が考えている宗教団体とは概念の違うもの、常識的な考え方は当てはまらない団体と認識すべきである。日本社会に存続させるならば自己変革をしてみらうしかない。」

「四月会」福岡シンポジウム

ジンジンをかいな。ところが今捜しよんねんけど、そのスワヒリ語を日蓮聖人がどこで使つてはるんか、ようわからへんねん。」
「ちゃんとした日本語ですがな。たしか日蓮聖人のお言葉の部分の一番最初でしたわ」

「あ、これか。『新春の慶賀、自他幸甚幸甚』。お前はフリガナだけ読んでへんなどころで切つてしまふからメチャメチャになつてしまふんや。ジとタを切り離してタとコをひつ付けるからタコができ上つてまうんや。正確に覚えとつたんは『新春』だけやないか、そやけど大まけして、ジンジンは三つやのうて、二つやつたから、ま、丸にしよう。」
「朝っぱらから酒飲んでましたんかいな、顔赤うなつてまつせ」
「正月くらいええやないか」
「『一年の計は元旦にあり』知つてまつか？一年でいちばん大事な日を、酒かつくらつてテレビなんか見なはんや。ワシを見なはれ、ここ来る前に必死で勉強して来ましたんやで。」

「お前が言うな、ちゆうんじやい。このスワヒリかぶれ」
「新年の挨拶も古式ゆかしく滞りなく、つつがなく終わりましたので、ちよつとおじやまさせてもらいまつせ」
「つつがなく終わったことにしようとしたけどな、挨拶だけで長い時間とつてな、この上にまだ何かあるんか？次行くところあるんやろ。ワシ、もう疲れたで」
「ほかに行くところ、どこもおまへんねん。それに和尚さんとゆつくり宗教談義なんて、ちよつとオシヤレな正月やおまへんかいな。お供えもおますしな」
「お供えか、ま、あがれあがれ、遠慮せん」と
「おい、お茶、早うもつてこいよ、と奥に入つて行くとテレビでは、正月番組の定番「かくし芸大会」をやっている。」
「もう宗教談義はやめとこな。また盆になつたら来るんやろ、そんなにしよな、な」
「しよおまへんな」

すかさず章子も応酬する。

「うるさいのは、お前の方じゃ、ボケ」
お互いに巻き舌になる。

「なんやコラ！」
「なんやコラ！」

食卓をはさんで、飛び交う「なんやコラ！」に、
タイミング良く入り込むのは熟練を要する。

「エンヤコラ」
「は？」

のり子も章子も口をアングリ。二人は顔を見合わせ、「アレ、なに？」

もう先ほどのまでの激しい応酬は、何ごともなかったように忘れてしまっている。

「お母さん、お父さん何言うてんの？」
「あなた達の仲間に入りたいのよ。ギャグ言うてはんのよ、ウケてあげなさい。かわいそうやから」

「あ、そうなん」
二人とも、しつかりとぼけている。

「お父さんのギャグ、むっちゃオモロいわ。おもしろい、おもしろい」
さめた顔して、二人で手をたたく。

「ほんでな、お母さん……」
また、のりこの話が続く。口を大きく開けて。自分で思いつきり笑う。

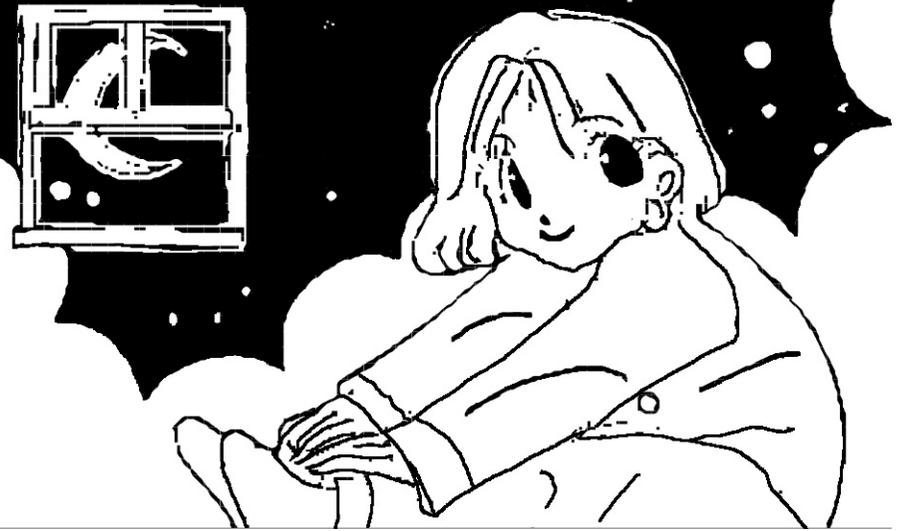
「ガハハハッ」

「あんたね、その笑い方やめなさい。前から言うてるでしょう。はしたないから。」
また振り出しに戻って、二人の娘が口ゲンカしたり腹かかえて笑ったり、いそがしいこっちゃん。そのうち女房まで一緒になって大笑いし出す。

「お前まで子供一緒になつてどうすんねん」
「だって私、まだ若いから、いろんな事がおかし

いのよ」

「ほんならどれだけ若いか試したる」と、食卓の上で女房の前に箸を一本コロコロとこころがしてみ



顔はひきつっていたが一応笑ってみせた。
「うーむ、敵もなかなかやるな」

特に中三ののり子の話題といたら恋愛の話

ばかり。ただ黙々とドンブリでメシを食っている高二の兄ちゃんも、時には姐の上に乗せられる。

「兄ちゃん、クラスの女の子がな、兄ちゃんのことメッチャかっこいい言うってたで。兄ちゃん、彼女おるん？」

ドンブリを持つてうつむきかげんにメシを食っているが、のり子の話を聞いて顔はほころんでいる。

「あ、兄ちゃん、顔赤こうなったわ。兄ちゃんテレとうわ。きつと彼女おんねんで」
兄ちゃんを指差して大笑いしている。

「ボケ！」と一喝する兄ちゃんは、たしかにテレている。

「お母さん、兄ちゃんホンマに彼女おるん？どんなひと？」

「知らんわ、お母さん。訊いても教えてくれへんもん」

「お前ら、うるさいんじや。あっち行け！」
ひとしきり騒いで、「ごちそうさま」と、サッと引き上げると、こんどは息子がボソボソと話し出す。「お父さん、冬休みにな、バイトしたいねん」

訊けば、チャンバーなるものが欲しいと言う。

「チャンバーてなんや？」
「マフラーのことや」

高一の時にバイクの免許を取りたいと言いだした。息子がおおきくなつたら、いざれこういう時

がくるだろうという話は夫婦でしていた。

「あなた、どうします？学校では禁止されているのに、孝彦があんなこと言いだして……」

「いいやんか、オレも中学から乗りよつた。男はな、中学か高校くらいになつたら、親がいかに言うても親に隠れてでも乗りよる。そんな事思うたら、

堂々と安全に乗つてくれた方がいいやんか。もつとも学校には内緒やけどな」
「そうは思うけど……」

「孝彦、確と言うてくけどな、他人様には絶対迷惑かけるな。これだけや。事故起こして、自分が死ぬようなことになつても、お前はこれだけの寿命やつたんやとあきらめる。そりや、子供が死ぬのは自分が死ぬことよりもつらいで。でもしかたがない。自分がどうなるかと自分のせいや」

「お父さん、恐いこと言うな」と言つた息子の反応には、しつかりと受け留めたような確かなでこたえが感じられた。

難なく出た親の許可に、息子はニンマリ。
「だいじょうぶやて、お父さん。ぼくはそんなムチャするタイプやないから」

ちよつとそこまでやのに、お遣いに行つて来いと言つと、ブツブツ言つてたくせに、

「おいッ、本妙院のおじいちゃんとか行つて書類もらつて来い」と言つと、

「おうッ」

バイクに乗りた

いものだから、

ホイホイ出かける。げんきな

もんや。



不惜身命

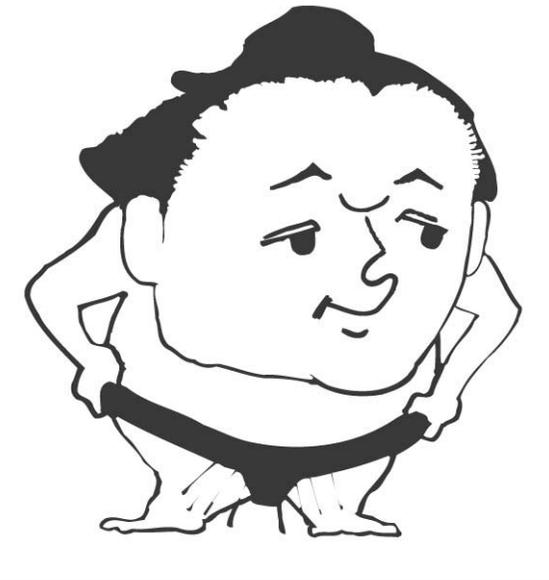
(ふしゃくしんみょう)

仏様のために身命を賭けること

坊さんは、お寺で催される年中行事の法要の折、あるいは葬式、法事等の機会に説教をする。仏さんの教え、お経の内容等、これでもかこれでもか、と言わんばかりにくりかえし説いてはみるが、その成果はいかばかりか？難解な仏教用語はおそらく、右から左、いや耳をよけて通り過ぎるのではないだろうか。

あの貴乃花には坊さんが百人束になつてかかつてもかなわない。受験勉強のように必死で丸暗記したのであろうあの口上の中で、貴乃花は、「不惜身命」という語句を使った。貴乃花の横綱昇進が巷でささやかれるようになった頃から、各マスコミは一門の慣例である四字成句に関心を示し、「貴乃花関はどんな熟語を使うでしょうね」と一斉に煽りたてたせいもあって、この

日はどれだけ「不惜身命」を目に耳にしたとか。ワイドショーをはじめ、ニュースでも新聞でも、大きく、しつこく、懇切に報じられ、一瞬にして日本全国津々浦々まで乱れ飛んだ。おそらく何百万、いや何千万の人が「不惜身命」という語句を、そしてマスメディアで解説された内容を理解したことと思う。



ちしてもかなわない。だけど、本来の意味からは、ちょっとズレていたので、次に記す。

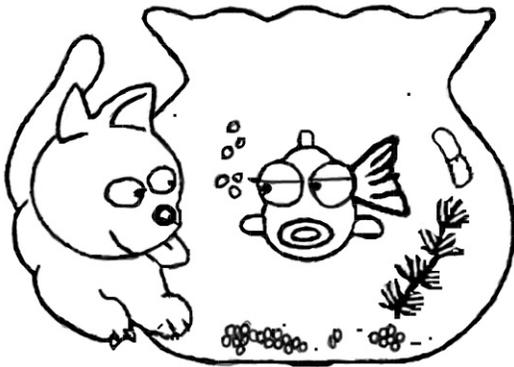
【不惜身命】

身命を惜しまずと訓む。法華経譬喩品の偈文。命にまさる財はないが、その至尊の生命をも投げだして法のために生きる至極の信仰を勧奨することば。同文は勸持品にあり、また同品に「我不愛身命但惜無上道」（我れ身命を愛せずただ無上道を惜しむ）、提婆品に「不惜軀命」、寿量品に「不自惜身命」などと同意の諸文がある。法は重く身は軽い。身を捨てても法を弘めよとの仏の遺誡で、日蓮聖人の一生は法華経の色讀・法華経の行者であったから、不惜身命・死身弘法を重視し実践された。「命を大乗の流布に替へ」「いたずらに曠野にすてん身を、同くは一乘法華のかたにながて」等と、殉教の決意を述べられる。

モメ編集

■毎年のことながら『山のたより』正月号はハラハラする。多忙な師走に原稿なんか書いとられへんわ、と挫折しそうになるが、今年もなんとかクリアーできた。奮起して原稿書き上げて、パソコンに入力するのに女房に頭下げなくてはならない。お迫ってから頼むものだから、もつとも早くからかかれたいの？もつともである。なんと罵られようとするでもらわないと、印刷屋さんご理解いただきますようお願いします、奥さま。

■檀家の法事を二軒控えている日に、ギックリ腰をやってしまった。法事をその日にこわる訳もならず、本堂で営んだ法事は、なんとか本堂まで這ってたどり着いたものの高座にも登れず、木魚もたたけず。終わったあと、法事に参列していた男性と息子の肩を借り、二人の肩にぶら下がってガレージまで運んでもらった。女房が運転する車では



後部座席に横になり、次の法事に出かけた。前もつて電話しておいたので、その家の息子さん二人がマンションの駐車場まで迎えに来てくれて、両脇から私をつり下げて階段を二階まで運んでくれた。この日は、ほとんど四つん這いに近い格好でお経を上げた。四つん這いの私に法衣を着せてくれた檀家の奥さん、ごくろうさんでした。

■先号で紹介した迷いネコがすっかり家族の一員になって、今私のヒザの上で丸くなっている。アッコがいちばん始めにつけた名前がタマ。そのうちニヤンクンにしようと言いだし、彼女一人だけニヤンクンと呼んでいた。その次、やつぱりハッピーがいいと言いだした。「そんなら父ちゃんが決める。名前はタマニヤンクンハッピーにするで、いいな」「そんな名前いやや」イヌ、ネコ共々、今年も清水一家をよろしく。あ、それからエアロピクスブタも。